
ooo after ~ 夜天の主と欲望の王 ~

a-o-w

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ooo after ㄱ 夜天の主と欲望の王ㄱ

【Nコード】

N7376Z

【作者名】

a-o-w

【あらすじ】

今までずっと一緒に戦ってきた『腕』と再び再開するため旅を続けている無欲な青年、「火野 映司」が旅の途中でたどり着いたのは、魔法文化が発達した世界、「ミッドチルダ」だった。

そこで映司は「4人の守護騎士」と、

「夜天の主」に出会い、

とある事件に巻き込まれていく…。

『夜天の主と欲望の王』(前書き)

今回初めての小説の投稿です。

はつきりいつて文章力と国語力は0に等しいです。なるべく見てくださる皆様にわかってもらえるよう努力していきますのでよろしく
お願いします。

あとスマホでの投稿なので途中 ん? となる

ことがあるかもしれせん。

ご了承ください。

私の完全な自己満足な小説なので完成度は

あまり期待しないでください。

あと小説を見て、気分が悪くなった方は

閲覧をやめてください。文句、クレームも

一切受け付けません。

「夜天の主と欲望の王」

暗い森の中、

少し変わった格好をした

20代ぐらいの青年が歩いていていた。

「???」はあ…はあ… 完全に迷ったなあ、携帯は繋がらないし、ここがどこなのかわからないし、はあ…」

その青年は旅をしている。

一緒に戦ってきたかけがえのない「腕」を探すために。

「???」…ま、まあなんとかなるでしょ、なんにも持ってないけど、明日の『パンツ』はちゃんとあるし！」

青年はまた再び歩き始めた。先の見えない旅の出口を目指して…

彼、青年の名は - 火野 映司 -

またの名を、 『仮面ライダーオーズ』

001話 世界の破壊者とパンツと異世界

映司「…結構歩いたなあ、でもいくら歩いても 木 ばっかりだなあ」

無欲な青年、火野 映司 は、いまだに森をさまよい歩き続けていた。

映司「お〜い、誰かあ！いませんかあ〜！？
助けてくださあ〜い！！ ……いるわけないか、
…困ったな、お前だったらどうする？」

…… - アンク - 「

映司はポケットから2つに割れた『メダル』を取りだし、悲しげな顔をしてそれを見つめる…。

映司「お前がいなくなっから、毎日が寂しいよ、アンク。いままでお前を復活させるため、いろいろな国を旅してきたけど何一つ手がかりがなかったよ…、なんかもう、やっぱり無理なのかな…」

その時、いきなり木から果物が落ちてきて、映司の頭に…、

- ゴンツッ! -

映司「…ツッ! ……いってええエエエ!!」

見事 hit した。

映司「…ははッ！ そうだよな、俺、何弱気になってるんだろっ、ごめんアंक！まだ俺諦めないから！絶対お前を見つげ出すから！」

映司は空に向かって叫びだした。

「必ず、お前を、見つけ出すからあッ！！！」

叫び終わった後、映司は落ちてきて果物を手に取り、食べながら歩き出す。

映司「よし、頑張つてこの森から抜けだすぞ！次はこっちにいつて

『おい、オーズ…』

…ん？ だ、誰！？

どこからか、声が聞こえてきた。

「…？」「こっちだ、うしろだ。」

映司「うしろ？…あ！ あなたは！？」

そこに立っていたのは、

かつて「世界の破壊者」と言われた者、

『仮面ライダーディケイド』だった。

映司「お久しぶりです！ディケイドさん！

シヨッカーの件以来ですね」

ディケイド「ディケイド『さん』ってお前…

まったくお前を呼びに『この世界』に来てみれば、お前こんなところまで何してるんだ？」

映司「いや、旅してたら道に迷っちゃって、ははッ！、…ん？俺を呼びに来たってどういう意味なんですか？」

その場の空気が一気に変わった…。

デイケイド「いいか、よく聞けオーズ…、お前はこれからある世界に行ってもらう、そしてお前には『ある事件』を解決してもらう、悪いがこれは『オーズ』にしかできないことだ、だいたいわかったな？」

映司「『だいたいわかったな？』…って全然わからないですよ！一体なにがどうなってるんですか！？だいいち、俺はもうオーズには…」

デイケイド「よし、よくわかってくれた、この世界のためにせいぜい死なない程度に頑張ってきてくれ、じゃあな。」

突如、映司の前に灰色のオーロラのカーテンが現れ、迫ってくる！

映司「ちよつとお！ 全然話聞いてないじゃないですかあ！ま、まっつて、ああああああああ…。」

映司は完全にこの世界から消え去った…。

デイケイド「すまない、オーズ…、さすがに無理矢理すぎたが、本当にお前にしかできないことなんだ…。

頼むぞ、『仮面ライダーオーズ』」

森には再び静寂になった…。

「????」はやてちゃ〜ん!?!?!」

「????」ん?どないした?リイン

リイン「空から、ぱ、ぱ……。」

はやて「ぱ?」

リイン「パ、パンツが

落ちてきたんですう!?!?!?!?!」

はやて「……………はい?」

映司「…っ痛てて、なにが起こったんだ?」

映司は辺りを見回す。そこは見たことのない建物の廃墟が一面に広がっていた。

映司「…え、え?えええええ!?!?!?」

-
-
-
-
物語は始まった。

002話 騎士とヤミーと復活のオース

時はさかのぼり、ミッドチルダ
機動6課隊舎

ブリーフィングルームにて会議が行われていた。

そこにいたのは

機動6課部隊長「八神はやて」

スターズ隊長「高町なのは」

ライトニング隊長

「フェイト・T・ハラオウン」

の、3人だった。

なのは「はやてちゃん、それで話って？」

はやて「えつとな、ついこの前の事なんやけども、ミッドチルダ市
街地で殺害事件があったんや。で、目撃者の話によると、『怪物に
襲われてた』っていう証言なんよ」

フェイト「でもミッドに『怪物』なんて…」

はやて「うん、一度も確認された事はないんよ、と、いうことは、
別の世界から来たとしか考えられへん。」

なのは「待って、でも、管理局のデータベースには…」

はやて「そう、そこや、なのはちゃん。時空管理局に引っかからず
にこのミッドチルダに次元移動なんてまず無理なんよ。と、いうこ

とは、最初からこの世界にいた、ということになるんよ」

フェイト「ッ！ そんな!？」

はやて「まあ、フェイトちゃんが驚くのも無理もないなあ、とにかく、

この事件は私とヴォルケンリッターが主体となって動きます。事によつてはフォワードと隊長陣も動くことになるかもしれないので頭に入れといてください。」

なのは「& a m p ; フェイト」了解!」

- 隊舎 廊下 -

なのは と はやてが歩きながら雑談していた。

なのは「それにしても大変だよね、JS事件が片付いて一段落したと思つたら次から次へと事件が押し掛けてきて、

はやてちゃん、体大丈夫？」

はやて「なのはちゃんにそれ言われる日がくるとわなあ…。」

なのは「にやはは、でも例の事件、はやてちゃんとシグナムさん、それとヴィータちゃんにシャマル先生とザフィーラさん達だけで動くってことでしょ？未確認の生物相手にたった数人でって、いくらなんでも危険なんじゃ…。」

はやて「大丈夫、心配あらへんよ」

はやては胸をはって言った。

はやて「なんてったって私は歩くロストロギア、『夜天の主』であの子達は私を守る守護騎士たちや、なんの問題なんてあらへん！」

なのは「そっか、わかった！でもくれぐれも無茶だけはしないでね。」

はやて「ありがとう、なのはちゃん。さて、そろそろあの子達にも説明しておかんと、

またね！なのはちゃん！」

なのは「じゃあね！はやてちゃん！」

それからしばらく時間がたち、はやての周りにはヴォルケンリッタ
ー全員が集められていた。

烈火の将 剣の騎士 シグナム

紅の鉄騎 鉄槌の騎士 ヴイータ

風の癒し手 湖の騎士 シヤマル

蒼き狼 鉄壁の守護獣 ザフィーラ

それと、今は亡き『祝福の風』の名を受け継ぐもの、
リンフォ
ース？

はやて「…と、いうことなんや。皆、わかった？」

シグナム「主、はやて 確認されている怪物というのはその一体だけなのですか？」

はやて「せや、ただどくれぐれも気を抜いちゃだめや、もしかしたら増援もあり得るからなあ」

ヴィータ「まあその怪物を取っ捕まえて全部吐かせりゃそれで事件解決って事だな！」

シャマル「こら、ヴィータちゃん。女の子がそんな汚い言葉遣いしちゃ駄目でしょー！」

ザフィーラ「シャマル、突っ込むところが色々違うぞ。…主、基本はシャマルと隊舎で待機という形で良いのだな？」

はやて「せや、基本は私とシグナムとヴィータが前線にでて、シャマルとザフィーラは待機や、あ！リンもな！」

リン「了解ですう！」

はやて「それじゃあ皆、気合いいれて、任務、開始！」

ヴォルケンス「了解！」

それからまた月日がたち、現在、シグナムとヴィータがパトロールをしていた。

ヴィータ「なあ、シグナム」

シグナム「なんだ、ヴィータ」

ヴィータ「こんなところに未確認なんか現れるのかよ」

シグナム「一樣確認だ、まあ人は住んでいないがな」

今パトロールしている場所はかつてジェイル・スカリエッティのガジェットドローンと交戦があった市街地である。今はとても人が住める場所ではない。

シグナム「前に報告があつた件以来、一度も事件が起きないのも奇妙だ。できれば機動6課が解隊になる前に解決したかったのだが」

ヴィータ「そつか、試験運用期間も残り数週間だもんな、あいつらもだいぶ成長し『ええええええええ！？』、な、シグナム！」

シグナム「悲鳴というより驚き声に聞こえたが、いくぞ！ヴィータ！」

二人は急いで悲鳴？が聞こえた現場に向かった。

その頃…

映司「ちよつと待てよ！ここどこ！？ま、待て、落ち着こう、そうだ、落ち着いて、えつと…」

ヴィータ「なんだ、一般市民か、こんなところでなにしてんだ？」

タイミングよくヴィータが空から降りてきた。

その時、なんの前触れもなく報告にあった未確認生物が襲ってきた！
シグナムはギリギリのところまでガードした。

シグナム「まったく…いきなりだな！」

ヴィータ「こいつが未確認か！おいそのへんな格好の男！死にたくなかったら早く逃げろ！」

映司「へんな格好って…、ていうか！あれって…『ヤミー』!？」

そう、報告にあった未確認生物というのはまさに『ヤミー』の事であつた。

ヴィータがグラフアイゼンを構えて戦闘体制を整えていると…

????「どこを見ている！」

ヴィータ「ツな!？」

ガキーン!

なんともう一体のヤミーも現れた!

ヴィータ「おい!もう一体なんて聞いてないぞ!？」

シグナム「くそツ!思っていた以上につよい、このまま長期戦に『よこせ…』ツ!？」

ヤミー「お前達の強さを、よこせ!」

映司「このままじゃまずい！でもどうすれば!？」

その時、映司のポケットに違和感があった。

映司「な、もしかして？」

ポケットを探ると、そこには

黄色のメダルと、緑のメダルと、

- - - 割れたはずのタカメダルがあった。

映司「なんで!?!?どうして…!？」

だがその時ウィータと交戦していたヤミーが映司に襲いかかった!

ウィータ「な!しまっ…!？」

ヤミー『よこせエエエ!?!?!?!』

映司「ッ!?!?!」

映司はギリギリのところであわし…

シグナム「貴様なにしてる!?!はやく逃げ…!？」

オーズドライバーを腰に巻き付けメダルをセットし…

ウィータ「ッ!?!？」

メダルをスキャンする!?!

映司「変身ッ！！」

『タカ！

トラ！

バッタ！

タ・ト・バ！

タトバ！タッ！トッ！バッ！！」

シグナム「な、なんだあれは…！？」

ヤミー『オーズ…オーズウッ…！！』

今、ミッドチルダに

『仮面ライダーオーズ』が復活した。

003話 謎の声と機動6課と新たなグリード

ヴィータ「なんだ？一体何が起きてるんだ！？」

ヴィータが驚いているのも無理もない。

なにせいきなり未確認が現れて、戦闘になり、もう一体未確認が現れ、

自分を小馬鹿にした（と思っている）変な格好をした青年が変な歌を流して上下三色の怪人？になったからである。

これにはさすがにシグナムも驚きを隠しきれない。

オーズ「変身できた…！よし、いくぞ！」

オーズはトラクローを展開して…

ジャキインツ！

ヤミー『グアアッ！』

ヤミーのお腹を切り裂いて、断末魔をあげ

その場に転がり回った！

お腹からセルメダルが大量にでてきた！

オーズ「やっぱり、こいつらヤミーだ！でもなんで？グリードなら全員…」

ヤミー『なによそ見してやがる！』

倒れたヤミーが再び襲いかかって、

ドゴオ！

オーズ「うわぁッ！！」

不意討ちをくらい、トラアームのパワーが
出せなくなってしまった。

オーズ「うわぁ！トラメダルさんごめんなさい！ど、どうすれば！
？」

その時、どこからか…

『…いじ、映司！これ使え！！』

オーズ「い、今の声、どっかで…っ痛た！」

空から突然『ゴリラメダル』が降ってきた。

オーズ「ゴリラのメダル！？さっきからわけわかんない事ばっかだ
けど、これなら！」

シグナム「終わらしてやる、レヴァンティン！ロードカートリッジ
！！」

ガシャコンッ！！

ヤミー『な、なにい！？』

シグナム「紫電…一閃！！！」

ヤミー『ゲワアアッ！！！！』

ドゴオンッ！！！！

ヤミーはシグナムの一撃により、爆発し、大量のセルメダルを撒き散らした。

シグナム「なんだこれは？コイン？、いや、メダルか？」

とりあえず一段落し、シグナムはオーズとヴィータに合流した。

ヴィータ「おい！！…えっと、タトバ！！」

オーズ「違うよッ！！この姿は『オーズ』っていうんだ。」

ヴィータ「じゃあさっきのタトバの歌はなんだ？自分の名前を歌ってたんじゃなかったのか！？」

オーズ「歌は気にしなくていいよ！！」

ヴィータ「気にならないほうがおかしいだろうが!!」

シグナム「いい加減にしろ!ヴィータ!!」
ポカッ!

ヴィータ「いつてエ…グスッ」

シグナム「うちのヴィータがすまなかった、とりあえず、なんだ、それを脱いでくれぬか?」

オーズ「ああ、そうですね、わかりました!」

オーズは変身を解除し、人間の姿になった。

シグナム「色々と質問したいのだが、まずお互いの自己紹介から始めよう、私の名は『シグナム』古代遺物管理部機動6課ライトニング分隊の副隊長だ」

映司「俺は『火野 映司』っていいます!それでさっきの姿は『オーズ』っていう、えっと、正義の味方ってやつかな?」

シグナム「『火野 映司』か、さっきは助かった、礼を言っぞ、火野」

映司「いえいえ、こちらこそ…『おいッッ!?!』」

ヴィータ「さっきからシカトしてんじゃねえ!私には聞かないのか!?!」

映司「ああ、ごめん!えっと、お名前はなんていうんだい?」

ヴィータ「私はヴィータ、機動6課スターズ分隊の副隊長だ。」

映司「ヴィータちゃんかあ、かわいいお名前だね。」

ヴィータ「お前絶対子供扱いしてんだろ！」

シグナム「まあ落ち着け、ヴィータ。…火野、いきなりで悪いが色々と聞きたいことがある、私達の隊舎までついてきてくれないか？」

映司「はい、いいですよ。もともといく宛もないし、俺が今、どこにいるかさえもわからないし…。」

シグナム「すまない、今すぐ迎えのヘリを呼ぶ」

映司（それにしてもさっきの声、いったい…）

・ヘリコプター内・

ヴィータ「映司」

映司「なに？ヴィータちゃん」

ヴィータ「お前は私が殺す」

映司「ッなんで!?!」

シグナム(こいつら、見てて飽きないな…)

- 機動6課 部隊長室 -

一人、落ち着かない人間がいた。

はやて「……………」。

リン「はやてちゃん、さっきからペンで机叩くのうるさいですう」

はやて「だってなあ…、リン、さっきヴィータから連絡あったんやけどなあ、『未確認二匹でて、変な格好したやつも現れて、タトバ歌ってセイヤーして片付いたから映司つれてそっち帰るぞ!』って、…状況わかる?リン?」

リン「ヴィ、ヴィータちゃんには、なにも悪気はないですよ!」

はやて「まあその『映司』って人も気になるなあ、もしかしたら未確認についてなにか知ってるかもしれんな」

リン「あ、着いたみたいですよ!」

ヴィーン

ドアが開く。

シグナム「主、はやて、ただいま戻りました」

ヴィータ「はやて、もどつたぜえ！」

映司「こ、こんにちわ〜」

はやて「ほな、お疲れさんな。…あなたが映司さん？」

映司「は、はい！火野 映司です！」

はやて「そんな硬くなんなくてええよ、私の名前は『八神 はやて
よろしくな、映司くん！』」

映司「そうだね…、よろしく！はやてちゃん！」

それから小一時間、お互いのこと、世界の情勢のこと、オーズのこと、魔法文化のことなど話合った。

映司「知らなかったなあ、本当に魔法があるなんて！はやてちゃん
なんか魔法みせてよ！」

はやて「多分映司くんの想像してる魔法とはかなり違つとおもつわ
…てか、映司くんのその『オーズドライバー』ってデバイスとはま
た違うんか？」

映司「う〜ん…近くて、遠いのかなあ？」

そんな話もしつつ、

はやて「あ、忘れてたわ！映司くん、あの未確認生物についてなに

か知つとることある?」

映司「えっとね…、簡単に説明するよ」

その場の空気が重くなりつつ、映司は口を開いた。

映司「あれは、『ヤミー』っていう、人の『欲望』をエサにする怪物なんだ。」

はやて「欲望?」

映司「うん、いっぱい食べたいとか、お金持ちになりたいとか、綺麗になりたいとか、そんな人の欲望をエサにするんだ」

シグナム「つまり、ヤミーが生きていくには人の欲望が不可欠、ということは、その親は人間ということなのか?」

映司「察しが良いですね、シグナムさん、その通りです。」

はやて「でも、そのヤミーってどうやって生まれるん?」

映司「大事なのはそこなんだ、はやてちゃん。そのヤミーを生み出す上位に位置する者がいるんだ、それが、『グリード』」

はやて「グリード…」

ヴィータ「つまりその『グリード』がいるかぎりヤミーは生まれ続けるってことか」

映司「でも、おかしいんだ、グリードはもう全員消滅したはずなんだ」

はやて「てことは、映司くんも知らないグリードがこのミッドチルダに存在してるってことか、はあ、一件落着と思っただけど、そういうわけにもいかないようやなあ」

映司（俺の知らないグリード…、ディケイドさん、これが俺がこのミッドチルダでやらなければいけない問題なんですか？）

・とある洞窟にて・

????「あれぐらいの人間の欲望では、まだこの程度のヤミーしか生まれないか、まあいい、まさかオーズがこの世界にやってくるとはなあ、おもしろい」

????は洞窟をでて、空を見上げる。

????「邪魔はさせんぞ、オーズ。俺は必ずこのミッドチルダでやっつてやる!!!」

世界の、終焉をッ!!!!!!」

ついに謎のグリードが動きだす…。

004話 隊長陣とフォワードと新たなヤミー

ヤミーとグリードについて話会った後、

はやて「と、いうことで、グリードを退治するまで映司くんを民間協力者っていう立ち位置になるんやけど、ホントにええんか？」

映司「うん、もともとグリード退治は俺の分野だからね、それに人は助け合いする生き物でしょ！」

はやて「うん、ありがとうな、映司くん…そうや！せっかくだから映司くんにうちの部隊のメンバー紹介するわ！」

ちようど昼ごろだったため、食堂に皆集まっていた。

はやて「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

なのは「あ、はやてちゃん！お疲れ様！」

フェイト「はやて、そちらの方は？」

はやて「紹介するわ、この人は『火野 映司』くんや、私となのはちゃんと同じ地球出身や！」

映司はなのはに頭を下げる。

映司「どうも、はじめまして、『火野 映司』です！よろしく、なのはちゃん！」

なのは「よろしくね、映司くん！」

そして、フェイトにも頭を下げようとするが…

映司「あ、ああ…」

フェイト「ど、どうしたのかな？映司？」

はやて「ん？えーじく〜ん？」

映司（な、なんだこの胸の痛み！？た、たしか前にもこんな事あったよな！？フェ、フェイトさん、すごく美人だな、だ、駄目だ、ま、まともに話せない！！久しぶりの『ラブッ！ラブッ！ラブッ！ラブッ！ラブッ！』）

今、映司の心の中で、『ラブラブラブコンボ』にコンボチェンジした。

はやて「あ、駄目や、完全にフェイトちゃんに目えいつとる」

フェイト「？」

映司「あ、え、映司でし！よろしく申し上げます！フェイトさん！」

年下なのになぜか敬語になってしまふ映司だった。

そして、次のテーブルに向かうとなのは達より更に若い四人が座っていた。

その中の内、青いショートヘアの女の子が

いきなり映司に話しかけてきた。

スバル「こんにちわ、映司さん！さっき部長室通りすぎるとき、全部映司さんのこと聞いてちゃいました！変わったデバイス持つてるんですって！？ぜひ、今、機動させて…『ポカツ！』…痛て、なにすんの〜ティア〜」

ティアナ「なに盗み聞きしたこと普通に話しちゃってんのよ！バカスバル！！…すみません、映司さん、怒ってません？」

映司「大丈夫だよ、スバルちゃんにティアちゃん、こんど機会あったら見せてあげるから、ね？」

スバル「ホントですか！？やったあ！！！！！！」

ティアナ「全く、救いようのないバカね…」

エリオ「ついに、ついにまともな男の人が身近に…」

キャロ「良かったね！エリオくん！」

…映司はエリオとキャロの二人を見ながらふと思った。いくら成人年齢が低いとはいえ、子供が前線に立って戦うことにはあまりいい気はしなかった。

映司（この子供は自分の意志で戦っている、俺がなにかしても恐らくこの子供の考えは変わらないだろうな、でも、あんまりいい気はしないかな）

映司「エリオくんにキャロちゃんだね、よろしく！」

エリオ&キャロ「はい！」

はやて「それと、映司くんにはまだ紹介してなかったけど、ヴォルケンリッターにはまだあと二人いるんよ」

映司ははやてと一緒に医務室に寄った。

シャマル「あら、はやてちゃん！それに、あなたが映司くんね」

映司「はい、これから少しの間、よろしくお願いします！…えっとザフィーラさんも、よろしくお願いします！」

ザフィーラ「……………」。

シャマル「ザフィーラはちょっと人見知りだからねえ、ごめんなさい…でも大丈夫！すぐ仲良くなれるわ！」

映司「はい！」

004話 隊長陣とフォワードと新たなヤミー（後書き）

うん、パンツのくだりとフェイトのくだりは蛇足だったかなあ
…。

005話 搜索と共闘と変形自販機

映司は機動6課に居候することになった。

次の日の早朝…

ティアナ「さて、今日の朝練もはりきっていか…って…え、映司さん？なにしてるんですか？」

映司「あ、ティアちゃん、おはよう！」

そこにいたのは、掃除婦の格好をして掃除をしている映司だった。

ティア「別に民間協力者だからそこまでしなくても…」

映司「でも、だからって何もしないわけにはいかないし、それに俺はこういう仕事好きだから！」

ティア（映司さんってホントにお人好しのね。）

それから少し時間がたち、ちょうど朝食の時間になった頃、映司はフォワード達と朝食をとっていた時、シグナムが深刻な顔をして話しかけてきた。

シグナム「火野、食事中悪いが、ちょっとブリーフィングルームまで来てくれないか？」

映司「え？はい、（もしかしてまたヤミー？）」

・ブリーフィングルーム・

そこには はやて とヴォルケンリッター達が集合していた。

はやて「すまん、映司くん、まあだいたい状況はわかるやろ」

映司「うん、またヤミーが現れたんだね」

はやて「せや、今日の朝方、管理局地上本部付近にて、Aランク魔導師一人の死体が発見された。死体の状況から見て、間違いなくヤミーの仕業や」

ヴィータ「死亡推定時刻はだいたい昨日の夜つとこだな」

シャマル「Aランク魔導師がやられたつてことは…」

ザフィーラ「ああ、この前よりパワーが上がってるヤミーという」
「だな」

シグナム「だが、ヤミーの動きがまったく掴めん、一体何が目的なんだ？」

映司「う〜ん…、っ！リンちゃん！！」

映司が突然大声をだし、周りは驚いた。

リン「な、なんですか？」

映司「今まで襲われた人達の職種ってわかる!？」

リイン「えっと…、全員管理局の職員です!」

映司「たしか魔導師には『ランク』ってのがあるんだよね!？皆のランクは!？」

リイン「えっとですね…、これって…ッ!」

はやて「なんや、リイン!？」

リイン「皆、Aランク以上です!」

シグナム「そうか、ヤミーが狙っているのは魔導師ランクが高い職員を狙っているのか!」

ヴィータ「あの時のヤミーは『力よこせ』って言っていたけど、また同じ人間のヤミーってことか?何匹連れてるんだ?」

はやて「なるほどなあ、せやけど次襲われるAランク魔導師なんて特定できんなあ、いっぱいおるし…」

映司「大丈夫だよ、はやてちゃん!」

映司は確信のついた表情で、再びリインに質問した。

映司「最近地上本部で、急激にランクが上がっている、魔導師っていない!？」

リインはパソコンで調べると…

リン「いました！ついこの前までCランクだった魔導師が、A+まで上がってます！！これは…地上本部の警備員です！！」

ヴィータ「間違いない！そいつがヤミーの親だ！」

はやて「まさに『灯台もと暗し』か…、よし！今回はヴィータと私と映司さんの3人で出撃します！シグナムとシャマルとザフィーラは待機や！」

全員「了解！」

・ 時空管理局地上本部 地下駐車場 ・

そこに、一人でブツブツ喋りながら循環警備をしている警備員がいた。

警備員「ははは、最初あの化け物を使って人殺してしまった時は恐ろしすぎて、数ヶ月は使う事できなかったが、慣れてしまえば、なんとも思わないな！もう少しで、もう少しで直属の局員になれる…ッ！…そうだ…別に俺が殺してる訳じゃない…全部あの化け物が出した事なんだ！俺は誰も殺してなんかない！！！！はっはッは！！！！」

はやて「いや、あんたが殺したんや」

警備員「だ、誰だッ!？」

警備員が後ろを振り向くと、

そこには、はやて とヴィータと

映司が立っていた!

はやて「遂に見つけたで!連続殺人事件の容疑者として、あんたを逮捕します!」

はやての関西混じりの声が、その場に響きわたった!

警備員「俺が殺人?ははッ!殺したのは俺じゃない!あの化け物だ!」

ヴィータ「ふざけんじゃねえ!お前の欲望が、何も罪のない魔導師を殺したんだ!」

警備員「さっきからゴチャゴチャと!おい、化け物!出てこい!」

シュタツ!

その場いきなりヤミーが現れた!

警備員「化け物!そいつらをやっちまえ!」

ヤミーが戦闘体制に入る!

映司「やっぱり、こういう展開になるんだね」

はやて「ヴィータ、映司くん、いくでえッ！」

ヴィータ「おう！はやて！」

映司「うん！」

映司はオーズドライバーを腰に巻き付け、
メダルをセツトし、はやて とヴィータは
デバイスを取り出す！

はやて・ヴィータ「セツト、アップ！！！」

映司「変身ッ！！！」

『standby Ready』

『タカ！ トラ！ バッタ！』

タッ！トッ！バッ！タトバ！タッ！トッ！トッ！バッ！！！！』

はやて とヴィータは騎手甲冑を身に付け、

映司はオーズへと変身した。

オーズ「いくぞ！ハッ！セイヤッ！」

オーズはヤミーにトラクローで引き裂き、
ヤミーが苦しんだところに…

ヴィータ「はぁぁッ！」

ドゴオオッ！

ヴィータのグラーファイゼンがヒットする！

ヤミー『グアアアッ！！』

オーズ（すごいな、パワーだったらゴリラアームぐらいあるな…）

ズガガガガッ！

そこから はやて の複数の魔法弾がヤミーに当たる！

はやて「どや？なのはちゃんお得意の『アクセル・シューター』の威力は！？」

オーズ「凄いよ、はやてちゃん！よし、俺も負けてられないな！」

オーズはバツタレグでヤミーを複数回蹴りつける！

ドゴオオッ！

ヤミー『ガアアッ！』

ヴィータ「これでお前も、おしまいな！警備員！！」

警備員「く、くそお！おい、化け物！何をしても奴らを殺せ！」

その時、ヤミーの動きが止まる。

ヤミー『なにをしても…いいんだな？』

警備員「ああ！とにかく奴らを殺すんだあ！」

ヤミー『それでは…』

ヤミーが警備員に寄り…

オーズ「…ツな！？」

ヤミー『お前の力を、よこせ！！！』

ヤミーは警備員を補食し始める…

警備員「や、やめろおッ！お、俺は…ただ、魔導師に、なり、たく
…ギヤアアアッ！！！！」

バキバキ、ゴキ…

ヤミー『ぶっ、ぶっ、ぶっ、ぶっ、ぶっ、ぶっ』

はやて「自分の親を…これがヤミー!!!」

ヴィータ「許せねえ!!!くらえ!!!」

ヴィータが再びグラーファイゼンで殴りかかるが…

ガシィッ!

ヴィータ「なにッ!うわぁッ!」

ヤミーは前よりパワーアップし、グラーファイゼンを受け止め、ヴィータは自分に叩きつけられた。

はやて「ヴィータ!!!」

「タカ!　ゴリラ!　バッター!」

オーズ「うおおおッ!」

オーズはタカゴリバに亜種チェンジし、ヤミーに殴りかかるが…

ヤミー「ふん、効かな…!」

オーズ「うそ!?ぐわぁッ!」

オーズはヤミーに投げ飛ばされ、壁に叩きつけられた。

ヤミー「ここじゃ流石にキツイ、場所を変えよう。」

そう言って、ヤミーは外に飛び出していった。

はやて「まで！逃がせへん！」

ヴィータ「くそ、待ちやがれ！」

二人は飛行魔法を使い、飛び出していくが、

オーズ「わああッ！？ちよつと皆まっつてえー！！」

オーズはただ1人走って追いかけていた。

オーズ「はあ…、はあ…、チーターのメダルかクジャクのメダルあればいいんだけどなあ」

しかし走っていると、駐車場の入口付近に…

オーズ「はあ…、…ん？、ッあああッ！…！！」

なんとそこには、あの自販機、『ライドベンダー』があった！！！！

オーズ「なんでミッドチルダに！？もしかしてディケイドさんかな！？まあいいや！使わしていただきます！」

セルメダルを投入し、真ん中のスイッチを押して、バイクモードに変形させた！

オーズ「よし、決着を着けてやる！」

オーズはアクセルを握り、猛スピードをだして、ヤミーを追いかけていった…。

006話 決着と解決と消えない欲望

ヤミーは地上本部から少し離れた海岸沿いにいた。

それを追いかけてきた はやて とヴィータも今、到着した。

はやて「さあ、いくでえ、ヤミー！」

ヤミー『ふん！お前みたいな小娘に、なにが…』
ドゴオオオンツ！！！！

しかし次の瞬間！高濃度の魔力砲がヤミーに直撃した！！

ヤミー『グワアアアツ！！！！こ、小娘えええ！！！！』

はやて「私はな、この世界ではちよつとは名の知れた魔導師なんよ
！さあ、どんどんいくでえ！！！！」

はやて は、シュベルトクロイツに魔力を収束する！！！！

キイイイイインツ！！

ヴィータ「はやて！その技って！！」

はやて「デイバイインツ！！」

ヤミー『ツ！？』

シュベルトクロイツから収束砲が発射される！！

はやて「バスターアアツ！！！！」

ドゴオオオオンツツ！！！！

ヤミー『ギヤアアアアアアツツ……！！！！！！！！』

ヤミーは数十メートル吹っ飛んだ！

ヴィータ「すげえや！はやて！ヤミーを吹っ飛ばした！！」

はやて「よし、これで少しは……『ズバツ！』ツ！？」

次の瞬間、ヤミーがはやての左手を爪で引っ掻いていた。

はやて「くッ！うう……」

ヴィータ「はやて！」

だがヤミーも虫の息だった。

ヤミー『はあ……、はあ……、流石にさっきのは効いたぞ、小娘、ぶっ殺してやる！！』

ヴィータ（くそ、いざとなったら本気で……ッ！？）

ヴオオオオオン！

遠くからバイクの音が響き、

『タカ！　トラ！　バツタ！
タツ！トツ！バツ！タトバ！タツ！トツ！バツ！』

やって来たのは再びタトバコンボにコンボチェンジしたオーズだっ
た！

ヤミー『グワアアアッ！』

オーズはライドベンダーでヤミーに体当たりし、そのまま　はやて
とヴィータのもとへ向かった。

オーズ「はあくやっど追い付いた、って、はやてちゃん！大丈夫！
？」

はやて「うん、大丈夫、問題あらへ…ツク！」

左手からは血が流れ続けていた。

ヴィータ「まってる！はやて！今シャマルを呼ぶから！」

オーズ「大丈夫、落ち着いて、はやてちゃん、ヴィータちゃん、二
人とも俺が絶対守るから！」

オーズは再びライドベンダーに乗り、ヤミーに突っ込んでいく！

はやて・ヴィータ「映司^{くん}…」

ヤミー『くそおおッ！オーズウウッ…！』

オーズ「くらえええッ！！！」

オーズはライドベンダーを飛び降りそのままヤミーにぶつける。

ヤミー「はあ…はあ…くそおおッ！！！！！」

そしてオーズはオースキャナーで、再スキャンする！

「スキヤニングチャージ！！！」

オーズ「はあアアアアアッ！！！」

ヤミー「ッ！？」

オーズの「タトバキック」が炸裂する！

オーズ「セイヤアアアアアッ！！！！！」

ヤミー「グワアアアアッ！！！」

ドゴオオオオンッ！！！！

ヤミーは大爆発し、大量のセルメダルが飛び散る！

オーズ「はあ…、はあ…、は、始めてこの技きまったかも…」

数時間後…

その後、管理局局員が集まり、事件の後始末をしていた。はやてはシャマルにより治癒魔法をかけられており、ヴィータと映司は夕陽が映る海辺を歩いていた。

ヴィータ「なあ、映司」

映司「ん？何？」

ヴィータ「映司は、こんな事件沢山みてきたのか？」

映司「…うん、数え切れないほど、ね」

ヴィータ「欲望って、無くならないもんなのかなあ…」

映司「残念だけど、それは無理なんだよ、欲望っていうのは生きる者全てに存在するからね、…でも欲望があることは悪いことばかりじゃないんだよ」

ヴィータ「？」

映司「人は欲望によって成長したり、学習したりしていける生き者なんだ、そこから過ちに気付くこともできるし、生き甲斐を見つけ出すことだってできる」

ヴィータ「…そっか、お前もたまには良いこと言っじゃねえか！」

映司「ちょっとお！それどついう意味なんだよ!？」

ヴィータ「さ、はやく はやてのとこ、帰ろっぜ!！」

映司「うん、そうだね!行こう!ヴィータちゃん!」

ヴィータ「だから、ヴィータ『ちゃん』はよせ!」

映司とヴィータは治癒を受けている はやて のもとへと帰って
いた…。

006話 決着と解決と消えない欲望（後書き）

とりあえず一段落、最後うまくかけなかったなあ。

007話 蒼狼とおでんと犬の怪物

- ミッドチルダ某所 -

そこには周りとの実力の壁に当たっていた、一人のマラソン選手がいた。

選手「くそッ、もうすぐ大会だっていうのに…、俺はノロマだ…せめて、もっと速くはしれる足だったら！」

???「その欲望…俺が叶えてやる…」

選手「な、なんだ!？」

次の瞬間、マラソン選手の目の前にあの『謎のグリッド』が現れた。

選手「あ、あ…」

???「ふん、面白い欲望だ、楽しみだな」

謎のグリッドはマラソン選手にセルメダルを投入する、すると、マラソン選手から一体の犬の形をしたヤミーが現れた。

選手「な、なんなんだ、こいつ!？」

???「そいつは、お前の欲望を叶えてくれる、さあ、解放してみろ!お前の、欲望を…!!!」

選手「ッ!……お、俺は…ッ!」

- 機動6課 -

映司「フェ、フェイトさんッ！」

フェイト「なに？映司？」

映司「き、今日は、良い天気ですねえ！」

フェイト「うん、そうだね」

仮面ライダーオーズこと、火野 映司は、フェイトと仲良くなりた
いがため、色々と格闘していた。

映司「フェイトさん！もし良かったら午後からお、お茶でも

『あ、いたいた〜』ッ!？」

突然はやてが横からわりこんできた。

はやて「映司くん、悪いけどヤミーについてちょっと聞きたいこと
あるからちょっとついて来てほしいんよ、あ、フェイトちゃん！ち

よつと映司くん借りていくなあ！」

フェイト「うん、いいよ！」

はやて「ほな、いくで！映司くん！」

映司「え！？ちょっと！わあ、あああッ！！！」

数十分後…

映司「うう…ひどいよ、はやてちゃん」

はやて「あははッ！！悪かったなあ映司くん！でも嬉しいわ、皆と仲良くなってもらって！」

映司はミッドチルダに来て、まだ日は浅いが、そのお人好しな性格のおかげで、機動6課のほとんどの人と仲良くなっていた。ただ、一人を除いて…

映司と はやて が一緒に廊下を歩いていると、前からヴォルケンリッターの1人、『ザフィーラ』が、歩いてきた。

映司「あ、ザフィーラさん、こんにちは！」

ザフィーラ「…ああ…。」

チラッと見たと思えば、一言だけ言ってそのまま歩いて行ってしまった。

映司「ザフィーラさん、やっぱり俺のこと、あまり良く思っていないのかなあ」

はやて「うん、ザフィーラは少し特殊やからなあ…（あかん！このままじゃいつまでたっても関係は良くならん！ここは私が一皮むかんとなあ！）」

・ブリーフィングルーム・

いつも通り、はやて、映司、ヴォルケンリッター達で、定期会議をしていると、はやてが定期パトロールのメンバー交代を言い出した。

ヴィータ「なんだよ、別に私とシグナムで良いじゃねえか」

はやて「だめや、たまには違うメンバーにでもしてみよか！」

シグナム「まあ、主ははやてがそう言うのなら…（まずい、あの主の顔は何か企んでいる…）」

シャマル「それで、メンバーって誰なの？はやてちゃん」

はやて「えっと、これから数日は 映司くんと ザフィーラの二人に任せるわー！」

ザフィーラ「…ッ!？」

映司「え、ザフィーラさんと？」

はやて「ほな、そついつことぞ、お願いなあ！」

…1日目

ザフィーラ「……。」

映司「……。」

かなり気まずい空気が流れていた。

映司「……。 (まずい、なにか喋らないと!) 」

映司は重い口を開いた。

映司「ぎ、ザフィーラさん」

ザフィーラ「何だ？」

映司「きよ、今日は良い天気ですね」

ザフィーラ「…曇りで太陽など見えないが」

映司「な!? あ、ホントだ! あはは…」

ザフィーラ「……。」

…2日目

映司「…。(今日こそは!)」

ザフィーラ「火野。」

映司「はいッ!?!」

ザフィーラ「私はこつちを巡回する、火野はそつちを頼む」

映司「は、はい…。」

…3日目

パトロールが終わった後の帰り道にて…

映司(はあ、今日もあまり話せなかった…ん?あれって!)

映司「ザフィーラさん!!」

ザフィーラ「なんだ?」

映司「おでん、食べてきましょ!」

ザフィーラ「…?」

・おでん屋台にて・

映司「いや〜ミッドにまさか屋台があるなんて、ザフィーラさん、おでん食べたことあります?」

ザフィーラ「ああ、主が作ってくれた物ならな」

映司「何食べよっかな〜、とりあえず、大根と、磯巾着と、…ザフィーラさんは?」

ザフィーラ「…人参と、卵を頼む」

映司「はいはい」

その後、不思議なことに何の抵抗もなく、お互いのことを話していた。ザフィーラは基本無表情だったが、前と比べて自分から良く映司に話しかけてきてくれた。

映司（もしかして…ザフィーラさんってただ単にコミュニケーションが下手なだけで、基本良い人なのかな?）

一時間程度屋台にいた後、二人で帰っていた。

映司「いや〜美味しかったですね、ザフィーラさん!」

ザフィーラ「ああ、久々に楽しかったぞ、礼を言う、火野…ッ！」

その時、ザフィーラが何かを察した！

映司「どうしたんですか？ッ！？」

映司もある気配を察した！

次の瞬間、ザフィーラに対してヤミーが襲ってきた！

ザフィーラ「っ！！！」

ザフィーラはなんとか攻撃をかわした。

ヤミーが体制を立て直す。

ヤミー「よこせ、…お前の、速さを！！！」

ザフィーラ「お前がヤミーか、悪いがすぐに終わらしてやる」

映司はあわててオースドライバーを腰に巻き、メダルをセットし、スキャンする！

映司「変身ッ！！！」

「タカ！　トラ！　バツタ！

タツ！トツ！バツ！タトバ！タツ！トツ！トツ！バツ！！！」

映司はオースに変身した！

オース「いくぞ！ハッ…て、あれ？」

ヤミーに対してトラクローで攻撃したが
とんでもない速度でかわされた。

オーズ「は、速すぎて攻撃があたらない〜!」

ヤミー「オーズ、お前の力はその程度か」

ザフィーラ「俺を忘れてないか？」

ドガアツ!

ヤミー「ッ!?ギヤアアアツ!」

ザフィーラの高速の拳がヤミーにヒットした!

ヤミー「俺より速い!?クソッ!」

ザフィーラ「…遅い!」

ドガガガッ!!

ザフィーラの連続攻撃が次々とヒットした!

オーズ「凄いや…ザフィーラさんってこんなに強かったんだ!!!」

ヤミー「だ、ダメだ、一回退散だ!!!」

ヤミーはそのまま逃げてしまった。

ザフィーラ「逃げ足なら、俺より早いみたいだな」

オーズは変身を解き、ザフィーラに駆け寄った。

映司「大丈夫ですか？ザフィーラさん？」

ザフィーラ「ああ、火野は大丈夫か？」

映司「はい！」

ザフィーラ「…火野、少し良いか？」

ザフィーラは突然深刻そうな顔をして、映司に質問した。

映司「な、なんですか？」

ザフィーラ「今まで生活してきた、お前から普通の人間から感じられない違和感を感じていたのだが…今、火野がオーズに変身して今まで感じていた違和感がわかったのだ、その違和感は今出現したヤミーの感じに非常に、良く似ていた…」

映司「ッ!？」

ザフィーラ「火野、お前…」

本当に純粹な、『人間』なのか？」

007話 蒼狼とおでんと犬の怪物（後書き）

活動報告に、『補足説明』を載せました。

008話 正体と追跡とラトラーター

ザフィーラ「火野、お前は本当に純粋な、

『人間』なのか？」

映司は身体中の血の気が一気に引いた。

映司「な、なに言ってるんですか？ザフィーラさん」

ザフィーラ「とぼけるな、火野」

映司「ッ!？」

ザフィーラ「主や他の者達は感じられない『気』を私は感じる事ができる、…頼む、場合によっては、私は火野を拘束しなくてはいけない。私もそんなことは、…したくはない…。」

めったに表情を表さないザフィーラが、悲しげな顔をして、映司に聞いた。だした。

少し時間がたち、映司は口を開いた。

映司「…わかりました。すべて話します。…俺の、身体のこと…。」

映司とザフィーラは、そのまま近くにあった公園に移動した。

映司「…ザフィーラさん、口で説明するより、直接見せたほうが早いので、その…見てて下さい。」

ザフィーラ「？、ああ…。」

映司「…、ハアアツ！」

ザフィーラ「ッ！？」

チャリリリリリリリンッ！

次の瞬間、映司の身体はオーズの時とはまた違った、異形の怪人の姿に変化した。

…そう、かつて『紫のメダル』の力になってしまった、『グリッド体』である。

ザフィーラ「…、なあッ！？」

流石にザフィーラは驚きを隠せなかった。

映司グリッド『これが、俺の正体です、…俺は、人間じゃ…ないんです』

…映司はザフィーラに全て話した。

映司は以前、ドクター真木との闘いで、コアメダルを身体に入れてしまい、人間からグリードにさせられてしまった。そのため、映司は一時期、人間にある『五感』の機能がほぼ全て無くなってしまった。

だが、最終決戦にて、映司の体にあつた『紫のメダル』は取り除かれ、時間がたつにつれて、五感の機能が少しずつ回復していった。…しかし、グリードへの変身機能と、『味覚』と『色彩認識能力』は治ることは、なかったのだ…。

映司は人間体に戻っていた。

映司「今の俺は、『人間』でもなく『グリード』でもない存在…、今まで黙っていてすいませんでした…、でも！別に騙す気は…」
次の瞬間！ザフィーラは映司の胸ぐらを掴み、激怒した！！

ザフィーラ「この大馬鹿者おツ！！！！なぜツ…なぜ今までそのような大事なことを黙っていたあツ！！！！！！」

映司は突然のことに、言葉もでなかった。

ザフィーラ「なぜ全て一人で抱え込むツ！！お前は我らがそこまで頼りなく見えるのかツ！！我らはツ！我らはツ！！」

止ました。

数分後…

映司とザフィーラは、再び機動6課に向けて歩いていった。

映司「すみません、ザフィーラさん、さっきは…その…」

ザフィーラ「別に気にするな、火野」

映司「はい…それでなんですけど、ザフィーラさん…俺の身体のこと、もう少し皆に黙っていてくれませんか？」

ザフィーラ「…！？火野！これ以上 主 達を『わかっています！』『ッ！？』」

映司「いずれ、その時がきたら、はやてちゃん達に、全て話すつもりです。それまで、お願いします！…！」

映司はザフィーラに対して、深く頭を下げた。

ザフィーラ「…わかった、お前を信じよう、…さて、さっきのヤミの件を急いで報告しなくては、いくぞ！火野！…！」

映司「はい！ザフィーラさん！…！」

映司（伊達さんや後藤さん、比奈ちゃんに言われたこと、また言われたなあ…、俺も、もっと成長しなくちゃッ！！）

・ブリーフィングルーム・

はやて「なるほどな、今回は大型のヤミーが表れて、ザフィーラを襲ってきたんか、けど変や、別に傷害事件の報告なんてきてへんなあ」

映司「ヤミーは、『その速さをよこせ』って言っていたんだ、…もしかして人間じゃなくて、『別な何か』を襲っているんじゃないのかなあ？」

はやて「うーん、…そや！リイン！」

リイン「なんですか？はやてちゃん！」

はやて「管理局のデータベースから最近起こった変わった事件を検索してな！」

リイン「時間かかっちゃうけど、頑張るですう！」

シグナム「リインフォース、私も手伝うぞ」

ヴィータ「映司とザフィーラのおかげで十分休めたし、体力はM A Xだぜ！」

検索作業は翌朝まで続いたが、特に目立った事件は見当たらず、捜査は難航していた。

しかし、事件は起きた！

フェイト「キヤアアアアアアッ！！！！！！！！」

はやて「な、なんや！！？」

映司「フェイトさんんッ！！！！？」

映司は一目散にフェイトの声がした所へ向かった。

はやて「こづいう時だけ行動はやいんやなあ……。」

- 機動6課 玄関前 -

フェイト「あ、ああ……！！」

映司「どうしたんですか！？フェイトさんッ！？……ッ！？！？？」

そこには、無残にエンジン部分を食い尽くされた、フェイトの車が
あった。

フェイト「ローンがあと数年あるのに…はは…ハハハッ！」

壊れかけているフェイトとは裏腹に、映司は真剣な目で車をみてい
た。

その場には はやて と ザフィーラも来ていた。

映司「これは間違いない…ヤミーの仕業だ！」

はやて「そうか、ヤミーは人間を襲っていたんじゃない、車のエン
ジンを奪ってたんか！」

その時、ザフィーラは狼の姿に変わり、すかさず車の食べられた跡
を必死に『匂い』を嗅いでいた。

映司「ザフィーラさん、何を!？」

ザフィーラ「火野、ヤミーの『匂い』がわかった!消える前に急い
で追いかけるぞ！」

映司「ええ!?!わかるんですか!?!ま、まあいいや!いきましよう
！」

映司はライドベンダーに乗り、ザフィーラと共に、ヤミーの跡を追
いかけていった!

はやて「たのんだなあ〜ザフィーラ〜映司くん!」

フェイト「うう、はやてえ〜」

はやて「はいはい、フェイトちゃん、はよなきやんでなあ」

・ミッドチルダ市街地・

そこにはとんでもない速度で走る狼の姿になったザフィーラと、ライドベンダーに乗った映司がいた!

ザフィーラ「火野!近いぞ!」

映司「はいッ!...あれ?ここは...」

たどり着いたのは、とある総合体育館だった。

ザフィーラは匂いをたどっていくと、男性更衣室にたどり着いた、そこには1人の青年と、...あのヤミーがいた。

選手「やめてくれ!他人に迷惑をかけてまで俺は速くなりたくない!」

ヤミー「何をいつている、お前は この世で一番速くなりたい、と願ったではないか」

ヤミーは捕食したエンジンをパワーに変換し、マラソン選手の足に送っている。

選手「嫌だッ！助けてくれえ！」

マラソン選手はヤミーから逃げる。

ヤミー『逃がすものか！』

ヤミーもすかさず選手を追いかける。

映司「ザフィーラさんッ！」

ザフィーラ「ああ、追いかけるぞ！」

…マラソン選手は外にある競技場まで逃げていた。

選手「こゝこゝまでくれば…」

ヤミー「逃げられると思っていたのか？」

選手「うわああッ！」

ヤミーはマラソン選手のすぐそばに立っていた。

選手「い、いやだ、誰か、誰かッ！誰か助けてくれえええッ！…！」

その時！

映司&mp・ザフィーラ「ておおおいッ！…！」
ドガアッ！…！」

ヤミー『ギヤアあッ！だ、誰だあ！？』

二人のダブルキックがヤミーに決まった！

映司「大丈夫ですか？早く逃げてください！」

選手「あ、ありがとうございます！」

マラソン選手は逃げていった。

ヤミー『ははッ！その狼男！お前の足は車のエンジンより速く走れるようだな！ほしい、お前の足がほしほしいいッ！！！』

ザフィーラ「誰がお前なんぞにやるものか」

映司「いきましよう、ザフィーラさん！」

映司はオーズドライバーを腰に巻き、メダルをセットして、スキヤンする！

映司「変身ッ！！」

『タカ！　トラ！　バツタ！

タツ！トツ！バツ！タトバ！タツ！トツ！バツ！！』

映司はオーズに変身した！

ザフィーラも構え直す！

オーズ「くらえッ！セイヤツ！！」

しかし、ヤミーはオーズの攻撃を簡単にかわす！

オーズ「ま、前より速くなってる！」

ザフィーラ「ツク！ ハッ！」

ザフィーラの攻撃がヤミーにヒットするが…

ヤミー「…ハハハハッ！！！」

ザフィーラ「ツ！？グハアッ！！！」

ザフィーラはヤミーのカウンターをくらい、膝をついてしまふ。

ヤミー「これで、終わりだあ！」

ヤミーがザフィーラに迫ってくる！

ズババババツ！

ザフィーラ「ツ！？」

狼「ぐあアアッ！」

なんとオーズがザフィーラを庇い、ヤミーの連続攻撃を受けてしまった！

ザフィーラ「火野、なぜ！？」

オーズはフラフラになりながら、ザフィーラに振り向く。

オーズ「ははッ、攻撃が出来ないなら…守るしかないかなって思っ
て…ツク！」

ヤミー『バカなやつだ、安心しろ！2人と一緒に殺してやる！』

ザフィーラ「本当にバカな男だ…だが、嫌いではない」

ザフィーラはオーズの前に立つ。

ザフィーラ「安心しろ、火野。こんな奴、俺1人で大丈夫だ」

しかし、ザフィーラも既にボロボロだった。

オーズ（くそ…俺にもっと力があれば…！）

『久しぶりにきいたな、お前の欲望』

オーズ「ッ!?!今の声!?!」

再び、オーズに謎の声が届いた!

『映司い!そいつには、このメダルだ!』

空から二枚の『コアメダル』が落ちてきた!

パシッ!

オーズはそれをキャッチする!

オーズ「『ライオン』のメダルと『チーター』のメダル!これなら
ッ!?!?!」

オーズはザフィーラの目の前に立ち…

ザフィーラ「火野?」

メダルをチェンジし…

オーズ「大丈夫です、ザフィーラさん。俺がザフィーラさんを守ります！」

スキャンするッ！

キンツキンツキイイインッ！！

『ライオン！トラ！チーター！』

ラッタ！ラッタア！ラト！ラーター！！』

オーズ「うおおおおおおッ！！！」

オーズのライオディアスが炸裂する！

ヤミー『ギヤアあッ！』

ザフィーラ（なんだ！？このパワーは？今までとは段違いだ！！）

オーズ「はああッ！！！」

そこに立っていたのは…

『黄色』のオーズ、
『ライターコンボ』ッ!!!!!!!!!!

008話 正体と追跡とラトライター（後書き）

長くなりました。つぎの話で『ザファイラ編』は、おしまいです。

009話 神速と現れたら闇といつか聞いた『声』

ミッドチルダ上空、1人の魔導師が飛んでいた。

はやて「飛行許可取るのにえらい時間かかってしもた、映司くんとザフィーラ大丈夫かなあ？」

機動六課部隊長、八神はやては映司とザフィーラが向かったと思われる場所に急いで向かっていた。

その時、隊舎にいたリインから、突然連絡が入ってきた。

リイン「はやてちゃん！聞こえますか！？」

はやて「ああ、聞こえるで、リイン。どないした？」

リイン「今、映司さんとザフィーラが交戦している場所からとんでもないエネルギーを感知たです！」

はやて「なんやて！？」

リイン「あと…さつきから正体不明のエネルギー現がその交戦場所に向かっているのが探知されてるです…そのエネルギー現のパワーは、今、映司さん達のいる場所から出ているエネルギーと同等か、それ以上なんです…気をつけて下さい！はやてちゃん…！」

はやて「わかった、ありがとな、リイン！（正体不明のエネルギー現…なんか、嫌な予感しかせえへんな…）」

はやては更に速度を上げ、オーズ達が交戦している場所へと向かっ

た…。

- 競技場 -

オーズは全身黄色に変わり、頭はまるで『ライオン』を催した形に、胸には『トラ』の紋章が浮かび、足は『チーター』の形状をしたものになり、オーズのコンボの一つ、『ラトラーターコンボ』にコンボチェンジした！！

オーズは犬の形をしたヤミーに対して構えた。

ザフィーラ（この力は一体！？最初にみた赤黄緑の上下三色の形態の時より、かなり『気』が上がっている！これが、…オーズの本当の力なのか！？）

オーズ「ッはあッ！！」

次の瞬間！オーズはザフィーラでさえ認識できない速度で、犬型ヤミーの体のあちこちをパワーアップしたトラクローで切り刻んでいた！

犬型ヤミー「ギャアあッ！！！！」

犬型ヤミーは身体中からメダルを吹き出し、悶え苦しんでいた。

現在オーズがメダルチェンジしているチーターレッグには、オーズの脚力によるスピードを最大限に上げる能力を持つ、さらにコンボになることにより、その力を数倍に上げ、究極の『速さ』を手にすることができるのだ！！

ザフィーラ「さあ、いくぞ、火野！」
オーズ「はい！」

そこから更にザフィーラのパンチとキックのコンボ技、オーズのトラクローによる高速の斬撃が決まる！

犬型ヤミー「グハアッ！……はあ……はあ……」

ヤミーに隙ができ……

オーズ「次で決めましょう！ザフィーラさん！」
ザフィーラ「ああ！」

ザフィーラは空へ高く跳び、
オーズはオーズキャナーでスキャンする！

『スキャンニングチャージ！』

オーズ「セイヤああああッ！……！」
ザフィーラ「ておおおいッ！……！」

そのままオーズは頭のライオディアスを輝かせ、トラクローで切り刻むトラクターコンボの必殺技『ガツシユクロス』を発動し、犬型ヤミーを切り刻む！！！！

ザフィーラは急降下キックをヤミーに食らわした！！！！

犬型ヤミー「ギャアああああッ！……！」

犬型ヤミーはそのまま爆発し、辺りには大量のセルメダルを撒き散らした！

オーズ「はあ…はあ…やりましたね、ザフィーラさん！」

ザフィーラ「ああ、やったな！火野！」

オーズとザフィーラは軽く拳と拳をぶつけ合った。

これでこの事件は終わるかと思っていた、
だが…

オーズ・ザフィーラ「ッ!？」

オーズとザフィーラはその場に近づく強大な力を感じた。『それは、少しずつこちらへと、近づいてきた！』

オーズ「この感じ…もしかして」

オーズとザフィーラは構え直す！

そこに現れたのは…

????『ほう、貴様がオーズか…』

そこには、異形の怪人が現れた。しかし、今まで表れたヤミーとは違い、馬に角が生えたような頭、背中には翼があり、足にはとても

鋭利な爪が生えていた。そして、とてつもないエネルギーを出していた!!!

ザフィーラ「くそ、また『ヤミー』か？」

オーズ「違います!…間違いない、こいつが

『謎のグリード』です!！」

そう、この怪物こそ、映司や はやて が追っていた、『謎のグリード』であった!！」

謎のグリード『初めましてだな、夜天の魔導書の守護騎士、…それと、他の世界のオーズ!』

オーズ「ッ!?(他の世界?ってことは、このミッドチルダにもオーズは存在したって事?)」

ザフィーラ「ッく!?!…何をしにきた!?!」

謎のグリード『なに…ただ俺は奪われた物を取り返しにきただけだ…さあ、…返して貰おうかッ!…!…!』

次の瞬間！謎のグリードはザフィーラに目掛けて攻撃してきた！

オーズ「ッ！！速い！だけどー！」

オーズはギリギリのところまで謎のグリードの攻撃からザフィーラを護った。

謎のグリード『ほう、ラトラーターコンボをそこまで使いこなすとは、…しかし！』

そうグリードが話したとたん、オーズとザフィーラの周りの『重力』が一気に増加した！

ザフィーラ「ッなに！？」

オーズ「うそでしょ！？これって…『ガメル』の能力じゃ！？」

そして謎のグリードは…

ズシュッ！

ザフィーラ「ぐあッ…！？」

オーズ「…ざ、ザフィーラさんッ！…！」

謎のグリードは…

ザフィーラの胸を貫いた…

その手には、ある「光る物」が握られていた…。

映司「ザフィーラさんッ！」

映司は重力攻撃から脱出し、ザフィーラの元へと駆け寄った、だがザフィーラは…

ザフィーラ「な、なんだ？痛みを感じないぞ？」

オーズ「ええ？」

ザフィーラは全くの無傷だった。それを見ていた謎のグリードは高らかに笑った。

謎のグリード『はっはッは！だから言っただろう、ただ、返してもらうと！…あと4つ、あと4つだ！』

オーズ・ザフィーラ「ツク！」

謎のグリード「…だが、これ以上邪魔されるのも面倒だ、ここで二人とも死ね！」

再びオーズとザフィーラに、重力攻撃が迫る！

オーズ「ツクそ！」

ザフィーラ「む、無念…」

その時、空から高濃度の魔力砲が、グリード目掛けて降り注がれた！

謎のグリード「ぐあッ！だ、誰だ！？」

そこには、やっと到着した八神はやての姿があった！オーズとザフィーラは重力攻撃から解放され、はやては二人の前に降り立ち、シュベルトクロイツを構えた！

はやて「それ以上やるんやったら、今度は私が相手や！」

オーズ「あ、ありがとうはやてちゃん、気をつけて！そいつがグリードだよ！」

はやて「なんやて！？」

そのとたん、グリードははやてを凝視した！…そしてグリードは口を開いた…。

謎のグリード『お前が現在の夜天の魔導書の持ち主か…そうか、くつくつく…俺はついてる！俺の復活は近いようだな、あつはつは！』

はやて「な、なんや、…気持ち悪いなあ、私が本気になれば、ここであんたをふっ飛ばすこともできるんやでえ！」

グリードは笑いを止め、両手を上げた。

謎のグリード『いやいや、今はやめておこう！まだ、俺の力もあまり戻っていないしな…しかし、時がくれば、その 夜天の魔導書に封印された、 667ページの物を 返して貰おう！』

はやて「な！？667ページ！？なんや、それ！？」

謎のグリード『最後に…オーズ！お前に良い事を教えてあげよう！』

オーズ「ッ！？」

謎のグリード『わが名は、アンジユ かつてこの世界の 他のグリード と、オーズ を倒した者だ！』

その場に衝撃が走った！三人は驚きを隠しきれなかった！

アンジユ『去らばだッ！』

はやて「なあッ！待て！」

しかし時は遅く、『アンジユ』という名のグリードは、いつの間に

か姿を消していた…。

その後、はやて達は、事件の後処理を行っていた。マラソン選手は、無事保護され、管理局員は事情聴取を行っていた。

映司「選手さん、大丈夫かなあ？」

ザフィーラ「彼も悪気があったわけではない、管理局ならわかってくれるだろう。」

映司「だと良いですね…おっと…」

ザフィーラ「大丈夫か？」

映司「はい、ちょっと疲れたかな」

映司は少しふらついていた。久しぶりのコンボによる疲労と連戦により、体は限界に達していたのだ。

ザフィーラ「…火野、少し聞きたいことがあるのだが、良いか？」

映司「なんですか？」

ザフィーラ「火野はヤミーとの戦いの時と、アンジユとの戦いの時も、自分の身より、私を優先して護ってくれた。なぜそこまで他人を優先する？」

映司「他人とか、関係ないです。目の前で立ちきられそつな『命』があるのなら、ただ護りたいだけです。」

ザフィーラ「……!!」

次の瞬間、ザフィーラの頭の中で、ある『声』がよぎった。

「……ただ俺は護りたいだけですッ……!!もう、誰も失いたくないからッ……!!」

ザフィーラ（なんだ？今の声は…遠い昔に、聞いたような…）

映司「ザフィーラさん、大丈夫ですか？」

ザフィーラ「ッ！あ、ああ、すまない」

ザフィーラはふと、我にかえる。そして、改めて映司に断言した。

ザフィーラ「ただ、護りたいだけ、か。私も『盾の守護獣』として、見習わなくてな、感謝するぞ、火野」

映司「ッ！はい！」

映司（遂に倒すべき敵が現れたな…苦戦すると思うけど、大丈夫な
気がする、だって俺の周りには、『仲間』がいるから！）

映司達の戦いは、
まだ終わらない…。

009話 神速と現れたら闇といつか聞いた『声』（後書き）

これにてザファイラ編は終了です。

次は、あの『バトルマニア』との話です。

あと、活動報告にて、あとがきと 補足説明2 を投稿しました。

12月28日は忘年会なので更新はしません。
すいません…（笑）

010話 烈火の将と過ちの騎士と師弟誕生（前書き）

今回からテコ入れを行います。
主な変更点は、

セリフ前の名前を廃止

状況の精密描写

の、2つです。

010話 烈火の将と過ちの騎士と師弟誕生

月の光りが微かに照らす路地裏で、2つの影が走っていた。

1人は甲冑を身につけ、その手には普通の物より少しサイズが大きい剣を持ち、桃色の髪色でポニーテールをした美しい女性で、もう1人はだるだるの服を身につけ、外はねっ気のある髪型をし、腰にはとあるベルトを巻いている少し変わった格好の青年だった。

「無線によれば次の角を右だ、急ぐぞ、火野！」

「はい、シグナムさん！」

映司達は、息を切らしつつ急いで、角を右に曲がると、

その先に、まるで中世の騎士を具体化したような『ヤミー』と、そのヤミーに教わっている、少し柄の悪そうな『学生』の姿があった。学生は腰を抜かし、壁に寄り付いていた。

「な、なんなんだてめえ！？俺がなにしたっていうんだ！？」

『。。。』

ヤミーは無言のまま、右手に持っていた剣を学生に向ける！

「ひっ！だ、誰か助けしてくれえ！！」

次の瞬間！ヤミーの剣が自分の頭上に上げた！そしてそのまま学生に降り下ろそうとしている！

それをシグナムが察知し、

「ツク！させん！」

風の如く、飛行魔法を巧みに使い、学生の前に移動し、ヤミーの降り下ろした剣をシグナムのアームデバイス『レヴァンティン』でガードした！

『ッ！…邪魔だ…』

「悪いな、これが私の仕事なのでなッ！」

シグナムはそのまま後ろで腰を抜かしていた学生に、大声で叫んだ。
「今のうちだ！はやく逃げろ！」

学生は緊張がほぐれたのか、生意気げに

「わ、悪いなあんだ、あばよッ！」

と、その場から逃げていった。

その後、映司がシグナムの近くまで来て、すかさず右手にオースキヤナーを持ち、オーズドライバーにあるメダルをスキャンする。ドライバーにはあらかじめ「タカ」「トラ」「バッタ」のメダルがセツトされていた。

「変身ッ！…！」

『タカツ！トラッ！バッタッ！』

タツ！トツ！バッ！タトバ！タツ！トツ！トツ！バッ！…！』

映司はオーズに変身し、シグナムの横に立ち、騎士ヤミーに対して構えた。

「な、なんか強そうなヤミーですね」

「うるたえるな、いくぞ！火野！」

シグナムはそう言うと、騎士ヤミーにレヴァンティンで攻撃する、
…が、騎士ヤミーも達人並みの剣さばきで、シグナムからの攻撃を
許さない！

シグナム「なかなかやるな、ツだが！」

『Schlangeform』

シグナムはレヴァンティンの携帯の一つ、

『シュランゲフォルム』を発動した。

レヴァンティンの刀身はまるで鞭のようになり、騎士ヤミーの身体
を複数回切り刻んだ！

『ッ！…。』

「今だ、セイヤツ！」

オーズはトラクローを展開し、騎士ヤミーに攻撃をしようとするが、

『…甘いな。』

「ッ！うわあッ！」

騎士ヤミーの剣がオーズにヒットした。オーズはリーチ負けをして
いた。

「ちよつとおッ！武器つかうなんて反則でしょ！」

「なにをやっている…！」

シグナムは思わず映司に突っ込んでしまった。

その隙を騎士ヤミーが見逃す訳もなく…

『ッはあ…！』

騎士ヤミーがオーズとシグナムに向かって剣から衝撃波を放った！

「うわッ！」

「くッ！…な？しまった！」

オーズとシグナムは壁に叩きつけられた！さらにシグナムはその衝撃でレヴァンティンを手放してしまった！

『オーズ、ここで消えろ』

騎士ヤミーがオーズ目掛けて突っ込んできた！

「くそ、どうすれば…あ！」

オーズの足元には先程シグナムが手放してしまったレヴァンティンがあった。

「シグナムさん、ちょっとお借りします！」

「な、なに？」

オーズはレヴァンティンを片手で持ち、騎士ヤミーに対して、かつてメダジャリバーを扱っていたようにやみくもに振り回す！

「セイッ…て重ッ！で、でも…！」

オーズは更に騎士ヤミーに対してレヴァンティンを振り回す！すると攻撃がヒットした！

『…ッ！よ、読めん…』

それもそのはず。映司が剣の使い方など知っている訳がない。シグナムはその戦い方を…

「……。」

ただ、じつと見ていた。

「セイヤああッ！」

『く、くそ……』

オーズが徐々に騎士ヤミーを押し始める！

「よし、今だッ！」

オーズはオースキャナーを持ち、レヴァンティンにスキャンする…？

「な、なにやってるんだ火野お！？」

「わあ！？メダジャリバーと間違えたあ！」

『（今だ…！）』

その隙に騎士ヤミーは空高く跳び、逃げてしまった。

…その場の空気が、重くなる。

シグナムが一言も喋らない。

（ヤバい！シグナムさん俺がバカやったから怒ってるのかな！？）

弟子になれッ!!!!!!!!!!!!!!」

「え、……ええええッ!?」

次の日、機動六課の部隊長室ではいつもは笑顔を絶やさないが珍しく深刻な顔をした はやて の姿があった。

「グリード、アンジュの出現と夜天の書の隠された667ページ、ザフィーラの身体からでてきたリンカーコアとはまた違うエネルギー体
、グリードと夜天の書には何か繋がりがあのか?…なあ、『リインフォース』、あんたは一体何を知つとるんや?…なあ…。」

はやては『夜天の書』を見つめ、悲しげな顔をする。

だが、そんな空気も『あの男』が一瞬で壊してくれた。

『はやてちゃああああんツ！！！』

「な、なんや！？」

突然映司がノックすらせず、部隊長室に入ってきた！

「な、どうしたんや、映司くん！」

はやて は酷く怯えている映司の様子をみて、少し焦っていた。その姿はまるで、鬼から逃げている子供のようにだった。

「シグナムさんの特訓がおかしいんだよ！準備運動でマラソン10kmって何！？」

はやて は、ああ、という顔をし、優しく映司の肩を叩いてあげた。

「映司くん、がんばってなあ」

「え、何！？もっと過酷な事でもあるの！？」

「みつけたぞ！火野！」
「ッ！！」

そこには仁王立ちしているシグナムの姿があった。近くにいるだけでも『熱い』。

「さあ、走るぞ！大丈夫だ、私も走る！」

「ちよ、ちよっと待…」

「さあ、いくぞ！」

「嫌だああッ！！！！」

シグナムは映司の首下を引っ張り、無理矢理連れていった…

「なんやろな…なんか、…なんやろ？」

微妙な心境のはやて だった。

「はあ…はあ…ホントに…ゲホッ…走った…」

「久しぶりに良い汗をかいた、ふう〜風が涼しい」

蔓延の笑顔をしているシグナムとは対象に、今にも死にそうな映司の姿があつた…。

「さて、今日から特訓を始めるわけだが、火野…」

「は、はい？」

映司が答えると、シグナムはとんでもない事を言い出した！

「これから特訓が終わるまで、『オーズドライバー』と『コアメダール』全てを預からして貰おう」

「……………え、…え？」

ええええええええええツ！?!?!?!?!?

映司の地獄の特訓が、始まった…。

011話 特訓と本当の『強さ』とガタキリバ

あれから数日、機動六課の訓練スペースでは、スターズの隊長である高町なのはと、その部下である、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、そして1人の『青年』が訓練を行っていた。

「さあ、後一分、私の『デイバイン・シューター』からにげきつてね！」

『はいッ！』

現在、三人はなのはの魔法弾から指定時間逃げつづける回避訓練を行っていた。

スバルとティアナは今までの訓練と実戦の積み重ねにより、決して楽ではない なのは の訓練をこなしていた。ただ、映司は…

「うわあッ！あ、危な、ちよ、ぎゃあ！」

ギリギリのところ回避したり、たまに一弾あたる…等、とても見えていられるものではなかった。

「映司くん…大丈夫？」

なのは は心配そうに、映司に近寄る。

「だ、大丈夫…です。」

映司はうつ伏せになりながら右手を上にあげ、ピースサインをだした。

「そうか、なら次の私との訓練も問題ないな！」

「あ、シグナム副隊長」

「ええッ!？」

いつのまにか、なのはの隣にはシグナムの姿があった。映司は驚き、うつ伏せの状態から急いで正座になる。

「さあ、火野!ついてこい！」

「ま、待ってください、ちよつと、疲れて…」

「何を言っている!さあ、いくぞ！」

シグナムが映司の手を握り、ほぼ強制的に連れていかれてしまった。

「ま、待って!ああああ……。」

「なのはさん…」

「なに?スバル」

「シグナム副隊長と映司さん見てると…ツぷ!くふふ…なんか面白いです！」

「こ、こらスバル!…ふふつ…でも、なんだか二人を見ると、夫婦漫才みたい!…あはははは!…」

「な、なのはさん笑いすぎ、あはははは!…!」

「なのはさんとスバル、なんであんなに笑ってるんだろう?」

「さあ火野、これを持って！」
「これは？」

シグナムから渡されたのは、何か特殊な加工を施された物でもなく、ただの「木刀」だった。

シグナムは木刀を両手で持ち、映司に対して構える！

「火野、手加減なしで私にドンドン打ってこい！」

「えっでも……」

「剣の扱い方はやりながら教えてやる、さあ、いくぞ！」

「わかりました……いきます！」

一時間後……

「痛てて……シグナムさん、手加減なさすぎですよ……」

「ふふ……しかし、なかなか良くなってきたではないか、火野」

映司の上達ぶりにはシグナムは感心していた。まだ基本しか教えていない筈なのだが

いつのまにか映司は教えていない応用すら自分で解釈して使っていたのだ。

「さて、この後はマラソン10kmだ、いくぞ」映司」

「あ、シグナムさん、今俺のこと名前で…」

「…ッ！ち、違う！い、いくぞ！」

「…？」

シグナムの顔は見えなかったが、頬が少し赤くなっていた気がした…。

映司とシグナムはミッドチルダの学園集中地帯のちょうど中央区を走っていた。

「はあ、はあ、…ん？あれって…」

映司の見た裏道の先に、一つの集団があった。よくよく見ると、その集団のまんなかには人影があった。

…いじめだ。

「あれは？ッ！火野！」

映司は言葉がでるより先に行動していた。その集団に向かって走って行った。

「ちょっとちょっとお！君たち何やってるの！！」

やべツ人だ！
皆、逃げる！

映司がたどり着く時には、いじめていた集団は逃げていった。

「君、大丈夫？」

映司は倒れていた学生に手をさしのべる。

「は、はい…ありがとうございます…」

映司とシグナムは、先程のいじめられていた学生を連れて近くにあったベンチに座らせていた。

「君、いつもあの子達に？」

「うん、僕は弱いから…いっつもあいつらがストレス発散のサンドバッグ変わりだっていって…。」

「誰かに助けを貰わなかったのか？」

「無理だよ…皆、見て見ぬふりをするんだ…僕がもつと強かったら…」

シグナムは激怒した！

「なんだそれはッ！それでも同じ人間なのか！？」

「落ち着いて、シグナムさん。君、ちよつといいかな？」

映司は学生に向かいあう。

そして、ゆっくりと口を開き、喋り始めた。

「君が言った通り、人って不利益なことに出会って平気で目を背けてしまう生き物なんだ、それは正しいと思うよ」

「…はい。」

「ッ！？火野！」

「…でも、君の言う『強さ』は違う。」

「本当の強さってというのは、自分のためにじゃなくて…誰かのためにどこまで自分が頑張れるかってことなんだ。」

「ッ！」

(火野…。)

「だからさ、まず仲間を作ってみたら良いんじゃないかな？一緒に笑って、泣いて、助け合うことのできる仲間をね」

学生はベンチから立ち、その顔には『笑顔』があつた。

「ありがとうございます！…まず、仲間を作ってみます！辛いかもしれないけど、絶対くじけません！だって…これが僕の『強さ』だから…！」

その後、学生と別れた映司とシグナムは、またマラソンをしながら、話していた。

「…火野、さっきの言葉、心に響いたぞ」

「ちょっと恥ずかしかったんですけどね、ははっ」

(本当の強さ、か…本当にいいは、面白い男だ…)

「だから俺はあなた達と戦いますッ!!!!!!」仲間』を助けるためにッ!!!!!!」

(なんだ、いまの声は…どこかで聞いたような…たしか、10年前に…)

シグナムが考えながら走っていると、
また一つの集団があった。

そこには、最初にシグナムが助けたあの柄の悪い学生がいた。
…しかし、様子がおかしい。

「あゝまたか、ちょっとお！君た…」

「さて、火野！何か変だ…」

その集団にいじめられていたと思われる学生の前に奇妙な影があった…。

「まさかあれは！『ギヤアアアア！』ッ！」

ポタッ！

柄の悪い学生の右手がその場に切り落とされた。…切断された部分からは血が次々と止まることなく流れ続ける。

「あ、あああ、俺の手があッ！！！」

「…君の自慢の右手だったんだよね…ふふ…どうだい？強みが無く

なつた気分は…」

メガネをかけ、髪がボサボサして、少しポツチャリ体型のいじめられていた学生が奇妙な笑い方をし、柄の悪い学生に呟く。

「おい、お前ら！助けてくれえ！」

や、やばい、なんだあの「怪物」は!？

お、おい逃げるぞ！

助けて！ひいッ！

柄の悪い学生の仲間は逃げていった…

「お前らぁッ!…く、くそぉ!!…!」

「どうだい?…ふふっ…俺の気持ち、わかったでしょ?…でも駄目だよ…君はこいつが殺すんだから…ひひひッ!」

そう、そのメガネの学生の前には、あの騎士ヤミーの姿があった!!

「シグナムさんッ!…あ、おとと…」

シグナムは映司にオーズドライバーとメダルを返した。しかし、そこにはシグナムの姿がなく、いつの間にか騎士ヤミーに向かって突進していた!

『ッ！』

次の瞬間、ヤミーの剣と、レヴァンティンがぶつかり合う！

「奇遇だな、また会うことになるとはな！」

『…邪魔だ！』

騎士ヤミーとシグナムは一旦間合いをとる。

「助けてええッ！」

そのまま柄の悪い学生は逃げていった。

「なんなんだ、あんた。俺の邪魔をしないでよ…！」

「なるほど、貴様がこのヤミーの親か、欲望はあの学生への復讐と
いったところか。」

シグナムはメガネの学生をにらみつける。

「そっだよ…ひひひッ…あいつは俺をいつもいじめてくるんだ…だ
けど俺は、力を手にした！絶対に、絶対にあいつに復讐するんだ！
はははははッ！…！」

「そんなこと、させないよ」

映司が腰にオーズドライバーを巻き、シグナム達に近づいてくる。

「君は確かにあの学生くんに散々酷いことされてきたと思う、けどね、君が今やっていることは、あの学生くんがやったことと全く一緒だよ」

映司はシグナムの横に立つ。

「うるさい、うるさい、うるさい!!!」

あんたに何がわかる! 『わからんな!』 つなに!？」

シグナムが続いて話す。

「貴様が何をされたのは、私達には、わからない、だがッ! 貴様のやるうとしている事は見過ごすことなど出来ない!」

シグナムは隣にいた映司に向かい少し微笑む。

映司も自然と笑顔になる。

「もういいよ…こいつらを殺してから、あいつも殺すんだから!」

「やっぱり欲望に飲み込まれた人間に説得しても無理か、準備はいいか、『映司』」

「ッ！うん、『シグナム』！」

映司は「タカ」「トラ」「バッタ」のメダルをセットしようとするが…

『またお前は、何一つ特にならないことを…』』

「ッ！またこの声だ、なあ、お前って…」

『今度はこのメダルだ、使え！映司！』

空からまた二枚のメダルが降ってきた。

映司はそのメダルをキャッチして、まじまじと見つめた…

「映司、そのメダルは？」

「大丈夫、さあ、いくよシグナム！」

「セットアップ！！」

「変身ッ！！」

『Standby Ready』

『クワガタッ！カマキリッ！バツタッ！

ガータッ！ガタガタキリッバツ！ガタキリバ！！』

シグナムは騎士甲冑を身につけ、

映司はオーズに変身した！

しかし、シグナムはオーズがいつもの姿とはまた違う事に気づく！

「映司、その姿は一体……」

オーズが変身したのは

コンボの一つ、

仮面ライダーオーズ ガタキリバコンボだった！！

太陽が沈みかけ、夕日が表れていた。

011話 特訓と本当の『強さ』とガタキリバ（後書き）

次回でシグナム編は完結です。

012話 増殖と透明のメダルと嫉妬心

ちようど太陽が沈みかけ、一日の終わりを迎える頃、ヤミーとの戦いが始まるうとしていた。

「久しぶりだなあ、このコンボ」

今、オーズが変身しているのはガタキリバコンボである。全身が緑色で統一され、頭はクワガタの角を連想させる形状をし、腕には力マキリの鎌があり、脚はバツタの力を宿した物だ。

「よし、いくぞ！セイヤツ！」

『ッ！』

オーズは腕のカマキリソードで騎士ヤミーを攻撃した。しかし騎士ヤミーは剣でカマキリソードを止める。

「まだまだ！ハッ！」

『ツグ！アアッ！！』

オーズはそのままクワガタヘッドから電撃を発生させ、騎士ヤミーを感電させた！

騎士ヤミーは電撃により、体を満足に動かせなくなってしまった。

『しまった、体が動かん…』

「な、なにやってるんだ！」

メガネの学生が焦り始める。

「ナイスだ、映司！私達もいくぞ、レヴァンティン！」

シグナムはレヴァンティンのカートリッジをロードし、騎士ヤミーを斬る！先程の電撃のおかげで騎士ヤミーは動きがだいぶ鈍ってしまい、得意の剣技が使えなくなってしまった。

「あまり良い気持ちではないが、今回は仕方がないな」

「シグナム、このまま一気にいこう！」

「ああ、映司！」

シグナムとオーズはそのまま騎士ヤミーに対して連続攻撃を始めた！オーズはカマキリソードで何度も攻撃し、バツタレッグで回し蹴りをぶつける！

シグナムはその持ち前の剣の腕を最大限に発揮し、騎士ヤミーを切り刻んでいく！

『調子に、乗るなあ！』

「ッ！！」

そのとたん、ヤミーから衝撃波を放ち、二人は吹き飛ばされた！

「くッ！映司！受けとれ！」

「え？おつと！」

オーズはシグナムからレヴァンティンを受け取り、そのまま騎士ヤミーに飛び込む！

「ウオオオッ！！セイヤアッ！！！！」

『グアアアッ！』

オーズはシグナムに鍛えられた剣さばきでヤミーを切り刻む！騎士ヤミーも対抗するがオーズは止まらない！

「これでえッ！」

『ギヤアアアッ！！！！！！！』

オーズのレヴァンティンによる渾身の一撃が決まった！

『はあ…くそ…』

「そ、そんな…ふざけるな！俺はゼツタイ復讐してやるんだ！絶対に邪魔されてッ！たまるものかあッ！！！！」

『ッ！又オオオオオオオオオッ！！！！』

次の瞬間！騎士ヤミーの体は今まで以上のパワーを放ち、みるみる姿が変わっていった！体は肥大化し、その姿もかつての中世の騎士の姿から、醜いエイリアンのような姿へと変貌した！

「映司、あれは一体！？」

「あれは『欲望の暴走』だ！欲望が肥大化しすぎて原形が押さえられなくなっただんだ！」

『グワアッ！！！！』

ヤミーから生えた触手がオーズとシグナムを襲う！

「ぐッ！」

「うわぁッ！！！！」

二人は触手によって吹き飛ばされた。

「ひひッ！いいぞ！そのまま殺してしまえ！」

「まずい…戦闘が長引けばこちらが不利になっていく！はやく決めなければ！」

「大丈夫だよ、シグナム」

「な、映司？」

「シグナムは俺が絶対！守るから！」

そのままオーズは、シグナムにレヴァンティンを返し、暴走したヤミーに突っ込んで行った！

「ま、まで映司！『それにッ！』…？」

「このオーズの本当の力は、ここからだよ！」

「本当の力って…ッ！な、なに！？」

次の瞬間！シグナムが目にしたのは…

『グオオオオオオッ!!!』

ヤミーは爆発し、大量のセルメダルが地上にばらまかれた。

「あ、あああッ!」

メガネの学生が逃げ出そうとするが…

「ッ!」

「ぐえッ!」

シグナムの鉄拳をくらい、その場に倒れてしまった。

「やったね、シグナム」

「ああ、格好良かったぞ、映司」

オーズとシグナムは軽く拳と拳をぶつけ合った。

『いや、本当に格好良かったぞ!』

「ッ!?!」

オーズとシグナムは後ろを振り返る!

そこにはアンジユの姿があった。

「ア、アンジユ! くそ、またこんな時に!」

「こいつがアンジユ、なんだ、この力はッ!」

『さて、今回め回収させてもらい…ッ!』

「うおおオオッ！」

『タカツ！トラツ！バツタツ！』

タツ！トツ！バツ！タトバ！タツ！トツ！バツ！』

オーズはタトバコンボへとコンボチェンジし、アンジュにパンチを繰り返す！

しかし、アンジュはオーズのパンチを簡単に受け止めた！

「く、くそ……」

『ッ！』

しかし、アンジュの様子がおかしい。

オーズとアンジュは一旦間合いをとり、いつもの高いテンションではなく、真剣な声でオーズに質問した。

『オーズ、…なんだそのコンボは、なんだその赤いメダルは！？』

「えっ？（こいつ、タカのメダルを知らないのか？）」

しかしすぐにアンジュのテンションが戻り、シグナムを見る。

「まあ良い、さて、返して貰うぞ！」

「ッく！」

シグナムはレヴァンティンでアンジュを斬った！しかし…

『どこを斬っているんだ？』

「な、なに！？」

なんとアンジユは自分の体を液化し、シグナムの攻撃を避けていた！そして…

ザシュツ！

「あ、あああ…」

アンジユの手がシグナムの胸を貫いていた。その手にはザフィーラの時と同じように光り輝いている物があった。

「シグナムツ！あれは一体！？」

オーズはタカヘッドの超視力でそれを見た。それは…

透明の『コアメダル』だった。

シグナムは力を振り絞りなんとかアンジユから離れた。

『あと3つ、あと3つだ！ハッハッハッ！』

「…そうか、アンジユはコアメダルを集めていたのか！」
「な、何！？」

(でも…なんでザフィーラさんやシグナムの体にコアメダルが…)

『さて、これで今日の仕事はおしまいだ、さらばッ！』

「あーま、まて！」

しかしアンジユは背中の翼をつかって、空高く逃げていった。

太陽は完全に沈んだ…。

それから少し時間がたち、今映司達は起動六課の部隊長室にいた。
あの後、メガネの学生は管理局に逮捕された。そして現在、映司とシグナムは事後報告を終えたところだった。

「ほな、二人ともお疲れさなあ」

「はあく事件も無事解決したことで、シグナムとの師弟関係も終わり、特訓もおしまいかあ、良かった良かった！」

「ん？なにを言っているんだ？」

「…え？」

「別に今回の期間だけなんて一言も言っていないぞ！この後も特訓だ！」

「えええ！？そんなあ…！」

「……。」

はやてはその二人のやりとりをただ、じつと見ていた。

「映司、先に訓練スペースで待っている、また後でな！ 主はやて、それでは失礼します。」

シグナムはそのまま部隊長室を後にした。…しかし はやて は見てしまった。

シグナムが振り向くとき、最高に良い笑顔をしていたのを…。

部隊長室は映司と はやて の二人きりになった。

「じゃあ はやてちゃん、また後で『映司くん』…ん？なに？」

はやては無理やり笑顔を作って映司に質問した。

「シグナムとかなり仲良くなったんやなあ！」

痛い…

「うん、一緒に訓練しているうちに、自然とね！」

痛い…痛い…

「しかも呼び捨てできる仲まで発展とはなあ…お母さん嬉しいわ！」

嫌だ…嬉しくない…

「お母さんって、はやてちゃんいくつなんだよ！」

お願い、子ども扱いしないでな…

「あ、映司くんシグナムとの約束あるでしょ！はよ行ってあげな
あ」

痛い…胸の奥が痛い…。

「あ！そうだった…じゃあね、はよてちゃん！」

映司は急いで部隊長室から出ていった。

部屋は静寂になった…

「わけわからんわあ…なんでこんなに見ているのが辛いん？…映司
くん…。」

いつもとは違う『事件』が起ころうとしていた。それはまた、違う
話で…。

012話 増殖と透明のメダルと嫉妬心（後書き）

シグナム編終了です。

次回の更新はたぶん2日ぐらいになりそうです。暇あったら更新します。

次の話では、物語の節目に入ります。

013話 掃除と動く陰と疑心

現在、起動六課では大掃除が行われている。

「くく、あ、はやてちゃん、この書類どこに置いたらいいかな？」

「ああ、それならその机の上に置いてな」

「うん、わかった」

いつもなら業者が来て、綺麗に隊舎を掃除してくれるのだが、今回は起動六課の隊員全員で掃除を行っていた。

「皆はりきって掃除してるね、はやてちゃん」

「せや、なんせここには色々な思い出があるからなあ…最後くらい、最高に綺麗にせなあかんとな」

はやて は少し悲しげな顔をした。

そう、起動六課の試験運用期間があと「2週間」を切ったのだ。

「…はあ、なんとか全部片付いたなあ…」

「お疲れさま、はやてちゃん！」

映司は はやてにコーヒーを渡した。

「おお！ありがとな、映司くん！」

二人はベンチに座り、一緒にコーヒーを飲み始めた。その二人の姿は、まるで兄妹のようだった。

『んぐツんぐツ…ぷはあ…あ』

「映司くん、まるでおっさん見たいやで、いくつなんねん！」

「はやてちゃんこそ俺と全く同じ動作してたでしょ！そっちがいくつなんだよ！」

「なんやてえくらえい！」

はやては映司の頬を両手で引っ張る！

「いぢぢ…なんの〜」

映司は続いてはやての頬を引っ張る！

「いだだ！負けへんで〜」

二人がお互いの頬引っ張り合っている時、ちょうど掃除を終えたなのは と フェイト と ヴィヴィオがはやて達の所に来た。

「あ、映司さん!」

「あ、おとと」

ヴィヴィオは映司に抱きついてきた。

「お、ヴィヴィオ、ママ達の掃除の手伝いはできたかあ？」

「うん! いっぱいいっぱいお手伝いしたよ!」

「そっか、ヴィヴィオちゃん偉いね!」

映司はヴィヴィオの頭を撫でる。

「えへへ」

「なのはちゃん達もお疲れさんなあ」

「そんなことないよ、もともとなのはが毎日掃除してくれたたし、ヴィヴィオもいっぱいお手伝いしてくれたしね」

「フェイトちゃんだっていっぱいお手伝いしてくれたもんね」

なのははフェイトの頭を撫でる。

「ちょっと…なのは、恥ずかしいよ。」

「にゃはは、…あ、そうだ、はやてちゃん?」

013話 掃除と動く陰と疑心（後書き）

借投稿です。まだ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7376z/>

ooo after ~ 夜天の主と欲望の王 ~

2012年1月2日09時46分発行